人生はギャンブル!?

――哲学は運をどう考えてきたか

古田徹也
（哲学者）

運は、我々の人生を大きく左右する、無視できない要素だ。運は哲学や倫理学の歴史のなかでどのように肯定され、否定されてきたのか。そして今、我々は運をどう受け止めるべきなのか。東京大学の古田徹也准教授が考える。

私たちの人生の道行きは、間違いなく運に大きく左右されています。私自身のこれまでを振り返っても、過酷な人生などと言うのはさすがに畏れ多いとしても、綱渡りと巡り合わせの連続だったと感じます。かつて自分が歩いた道を再び歩く勇気は、今の私は持ち合わせていません。それくらい、偶然に翻弄されてきたと思いますが、多くの人が同じような感慨を抱いているのではないでしょうか。

しかしながら、誰かが「人生は運次第だ」と口にした途端、私たちはその言葉に不道徳な響きを聞き取らずにはいられません。人生が運に大きく左右されるということを知っているにもかかわらず、誰かが人生の道行きを運頼みにしているように見えたとき、また、そのことを明言したとき、私たちはそこに怠惰や、持つべき意志の放棄を感じ取ってしまうのです。

こと実業の世界での成功を自負する人たちには、人生とは意志と努力で切り拓くべきものであり、成功していない者は真の意味での努力が足りないのだ、と信じる傾向もあるようです。その人たちの人生の岐路でも、運が介在したことがしばしばあったことは間違いないと思うのですが、すべて意志と努力でしかるべき道を選び取ってきたと考えることで、その人たちのアイデンティティや自信、自尊心のようなものが保たれるのかもしれません。

それにしても、多くの人が運頼みの生き方を「不道徳」に感じてしまうのだとすると、運と道徳は本質的に食い合わせの悪いものだということになります。実際、倫理学の世界では、運は道徳的な世界の実現を阻む障害であり、理論を攪乱するノイズとして追いやられ、ときにはあたかも存在しないかのように扱われてきた面があります。私は、あるときから哲学や倫理学の「表通り」から追いやられてしまった「運」のことが気になりだして、いわば「裏通り」の地図として『不道徳的倫理学講義』（筑摩書房／二〇一九）なる本を書いたこともありました。

時代を遡れば、ソクラテスやプラトンなど古代の哲学者たちは、文字通りの意味で命を懸けて、「運」という難問と格闘していました。後世の哲学や倫理学で運をめぐる議論が後退したのは、古代ギリシアの哲学者たちが説いた「努力や善行が報われる社会」という理想像が深く浸透したことの証でもあります。

偶然と必然

善き行いをする者こそが幸福になり、悪人が非難や罰を逃れることはない――このような思考は、心理学の分野では「公正世界仮説」といわれ、基本的に認知バイアス（先入観による非合理な思い込み）の一つとして扱われています。公正世界仮説においては、単なる不運に過ぎないことも当人の咎に帰されます。たとえば、性犯罪被害者に対して「露出度の高い服を着ていたからではないか」と疑義が差し挟まれたり、盗難に遭った人が不注意を詰られたり、といった具合です。「自業自得」や「因果応報」など、公正世界仮説の世界観を反映したことわざは、古今東西、枚挙に暇がないほど存在します。

公正世界仮説的な考え方と人間の関係については、古代ギリシアまで遡って考える必要があります。古代ギリシア語で「運」を意味する言葉はいくつかありますが、なかでも「テュケー」という言葉は、「偶然」と「運命」という二つのニュアンスが込められており、両者の強弱によるグラデーションがあります。そして、日本語の「運」という言葉にもやはり、同様のニュアンスを見て取ることができます。

「偶然」はたまたまもたらされるものであり、「運命」はあらかじめ人生を決定づける必然的なものです。まるで正反対にも思える意味が「運」の裏表を成しているというのは、考えてみれば奇妙なことです。偶然であれ、必然であれ、人生が運に支配されているならば、善行や努力といった「公正」な振る舞いは意味をもたず、報われないことになります。実際、古代ギリシアの文学作品には、運ないし運命に抗うようにもがき、敗れ去る人物が数多く登場します。

人生が運に翻弄され、公正さが報われない社会では、人々が刹那的かつ利己的に振る舞うことを最も合理的な生き方として選んでしまっても不思議はありません。そんな世情にあって、それでも、運に頼らずに意志の力で「善く生きる」ことの意義を人々に説くことが自らの責務であると考えたのが、デモクリトスやソクラテス、その弟子のプラトンといった哲学者たちでした。たとえばプラトン初期の対話篇『ゴルギアス』で描き出されるソクラテスは、「人は何よりもまず、公私いずれにおいても、他人に善き人と思われるのではなく、実際に善き人であるように心がけなければならない」と語っていま

この続きは本誌でどうぞ！

写真＝落合隆仁